

イヴァン・ジャブロンカにおける歴史記述の問題について

外国語学部 真野倫平

はじめに ジャブロンカについて

本論では、現代フランスの歴史家イヴァン・ジャブロンカにおける歴史記述の問題について検討する。彼は1973年にパリに生まれ、高等師範学校で学んだ後、2004年にパリ第4大学に博士論文「共和国の捨て子たち セーヌ県の公的扶助を受け里親に預けられた孤児たちの子供時代とその後」を提出した。歴史の教授資格を取得し、現在はパリ第13大学の教授を務めている。伝統にとらわれない斬新なスタイルで歴史研究の新たな地平を切り拓く、気鋭の歴史家である。

著書としては、ジャン・ジュネの伝記『ジャン・ジュネの明かしえぬ真実』（2005）の他に、『父もなく母もなく 公的扶助を受けた子供たちの歴史(1874-1939)』（2006）、『異国の子供たち レユニオン島の孤児の本土への移住（1963-1982）』（2007）、『共和国の子供たち 1789年から今日にいたる若者の統合』（2010）など、児童福祉に関する研究書を立て続けに刊行している。

ジャブロンカはさらに『私にはいなかった祖父母の歴史 ある調査』（2012）と『歴史は現代文学である 社会科学のためのマニフェスト』（2014）を刊行し、大きな話題を呼んだ。前者は、第二次大戦中にアウシュヴィッツ強制収容所で亡くなった自らの祖父母の伝記であり、歴史書とも文学書ともつかない独自のスタイルで書かれている。後者は、歴史記述についての史学史的な考察であり、前者の理論的な基礎をなすものである。前者は学界において高い評価を受け、アカデミー・フランセーズ・ギゾー賞、歴史書元老院賞、オーギュスタン・ティエリ賞を受賞した。

『他人の身体』（2015）はエステティシャンについての社会学的研究である。また、『レティシア 男性の終焉』（2016）は、2011年に実際に起きた殺人事件についての調査である。『祖父母の歴史』と同様に独自のスタイルで書かれた同書は、文学的な観点からも高い評価を受け、同年のメディスス賞とル・モンド文学賞を受賞した。歴史と文学の両方の領域で受賞歴を持つことから、ジャブロンカの仕事が既成のジャンルの枠組みを超えた学際的な研究として高い評価を得ていることがうかがえる。

本論ではまず、『歴史は現代文学である』を取り上げ、ジャブロンカの歴史記述に関する理論的な考察について検討する。さらに『私にはいなかった祖父母の歴史』と『レ

ティシア』を取り上げ、彼が歴史研究の実践においてどのような叙述形式を創造したかを検証する。以上の作業を通じて、彼の歴史記述に関する理論と実践が、現代の歴史研究においていかなる意義を持つのかを考察したい。

1 『歴史は現代文学である』

ジャブロンカは同書において、歴史と文学の関係という古くて新しい問題を取り上げる。今日では一般的に、歴史は科学の領域に、文学は芸術の領域に属するものと考えられている。しかし、彼はそのような区分を否定し、あえて「歴史でも文学でもあるようなテキスト¹」を構想することを提案する。それは、書法の革新こそが歴史の新たな認識を開拓すると考えるためである。「ヘロドトスからポリュビオス、キケロからヴァッラ、ベールからギボン、ミシュレからルナンにいたるまで、あらゆる認識上の前進は等しく文学的革新によってなされてきた²」。

ジャブロンカは第1部「大いなる離別」において、古代ギリシアから現代に至るヨーロッパの歴史記述の歴史をたどりなおす。歴史というジャンルはヘロドトスによって創始されたが、当初から科学と文学のあいだで曖昧な地位を占めてきた。近代において歴史は文芸（ベル＝レットル）の一部として、「科学」と「文学」（レットル）のあいだの「第三の教養」として扱われた。「したがって、歴史は居心地の悪い立場にいることになる。文芸のシステムの中にとどまるかぎり、それは最後尾の文学ということになる。しかし厳密な科学のあいだでは、それは正当性を持たない³」。19世紀、歴史と文学（リテラチュール）は相互に刺激を与え合い、ともに大きな飛躍を遂げた。オーギュスタン・ティエリはウォルター・スコットの小説から生氣ある叙述スタイルを学び、他方でバルザックは歴史から社会を分析する方法を受け継いだ。それは双方のジャンルにとって実り豊かで生産的な時代であったが、かえって歴史の地位をめぐる問題を顕在化する結果となった。第三共和政下、歴史は大学において実証科学としての地位を確立したが、それは自らの文学性を切り捨てることによってであった。しかしこうして誕生した方法的歴史は、アカデミズムの制度の中で不毛なまでに形骸化した。「この『解放』から抜け出したとき、歴史は身体の一部を失い、孤立無援となり、

1 Ivan Jablonka, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Seuil, 2014, p. 7. 以下、同書についてはHLCと略記しページ数を付記する。

2 HLC, p. 13.

3 HLC, p. 44.

貧弱な認識しか持たなくなっていた⁴。『アナル』学派の歴史家たちは、前世代の歴史的方法的硬直を激しく批判したが、自らの歴史の科学性を強調するあまり、歴史の文学性に注意を向けようとはしなかった。20世紀後半の言語論的転回の潮流は、歴史の文学性に再び光を当てたが、その反面で歴史は真実を語りえないという懷疑主義を蔓延させることになった。「それは嘆かわしい徒労であった。ナラティヴィストが歴史は書かれ物語られるものであると証明することに成功したその瞬間に、歴史はポストモダンの懷疑主義によって——またもや——文学に反するものと自らを定義せざるをえなくなったのである⁵」。歴史は、文学的な側面を持つかぎり科学として不完全であり、科学的な側面を持つかぎり文学として不徹底であると見なされる。現在なお、歴史は科学と文学のあいだで居心地の悪い立場に置かれている。

これらの仕事はみな革新的で刺激的であるが、それらは密かな悲しみの上に立脚している。それは、歴史がもはや文学ではないということである。自分自身から追放された歴史は、かたくなに文学ならざるもの、テキストならざるもの、書法ならざるものであろうとした。歴史は、古代や古典主義時代には文学(レトル)という「第一の教養」と混同され、19世紀には科学という「第二の教養」によって魅了されたが、1930年頃には社会科学という「第三の教養」を取り込んだ。しかしそれは、書法ならざるものが科学性を保証するという信仰も一緒に取り込んだ。方法なき文学は文学なき方法に場所を譲った。この断念は一種の自己憎悪であった。というのも、文学を歴史から排除することはできないからである。われわれはせいぜい、文学を無味乾燥にし、無意味で平板なものにできるだけなのだ⁶。

このような袋小路から脱出するために、ジャブロンカは第2部「歴史の論理」において、歴史の根本的な再検討を試みる。社会科学としての歴史の目的は、歴史の論理に従って過去についての知識を生産することにある。歴史小説がどれほど歴史を忠実に再現しようと、新たな知識の生産に貢献しないかぎり、それは歴史ではない。他方で、一部の作家は自らの作品——たとえばピエール・パールの『歴史批評辞典』——において、歴史の論理に従うことで「科学としての歴史」を実践してきた。「歴史の

4 HLC, p. 95.

5 HLC, p. 109.

6 HLC, p. 116-117.

論理」とは、社会科学が課す一定の手続き——問題提起、資料収集、比較、仮説の作成ならびに破棄——であり、歴史家はそれを遵守するかぎりにおいて、あらゆる自由を保障される。「これ以降、歴史は、原資料が定める絶対的限界の中における自我の絶対的自由となる。われわれは、調査や手に入れたすべての知識と矛盾しないかぎり、何でも言い、想像し、信じることができる⁷」。そのとき、「方法としてのフィクション」は歴史家にとって最大の武器となるだろう。歴史家はフィクションを「再現としてではなく […] 認知的な作業として⁸」、つまり創造の道具ではなく認知の手段として——離反、信憑性、概念化、叙述の手法といったかたちで——用いることで、新たな真実を開拓するのだ。

したがって、フィクションはそれ自体では虚偽でも真実でもない。フィクションは、自分が自足していると考えるかぎり、真実と関係を持たない。フィクションは、現実を再現することで満足するかぎり、あるいは、たとえばゾラやヴェルヌがしたように、辞書の説明や医学理論や分類学を書き写してテキストに「知識」の断片を挿入するかぎり、真実と不完全な関係しか結ぶことはできない。 […] 反対に、フィクションは、知識の操作者として知の生産のプロセスに加われば、真実と関係を結ぶことができる——たとえば、問題（スコット、バルザック）、異化（スターン、ボルヘス）、仮説（ドストエフスキー、ウェルズ）、理念型（ボヴァリー夫人のような女性、カフカの世界）、叙述の構成（ウルフ、ドス・パソス、フォークナー）といったかたちにおいて⁹。

ジャブロンカは第3部「文学と社会科学」において、フィクション／事実に基づくものという伝統的な二項対立を超えた、「調査」としての歴史のあり方を提案する。「調査とは、物語を論理によって推進することであり、認知的な活動である¹⁰」。それは狭義の社会科学のみならず、「現実についての文学」と呼ばれるもの——実際の文学としてしばしば軽視されてきたもの——を内包する。歴史は、こうした文学からさまざまな技法を取り入れることで、現代にふさわしい新たな書法を創造することができるだろう。「したがって、社会科学の現代化について考えるのが有益だろう。それは、社会科学の存在理由である、理解と説明と真理陳述のための努力に、その書法

7 HLC, p. 185.

8 HLC, p. 196.

9 HLC, p. 211-212.

10 HLC, p. 240.

を合致させることにある¹¹】。

ジャブロンカはここで自著『私にはいなかった祖父母の歴史』を援用しつつ、歴史家として「方法としての私」を活用することを提案する。それは、社会科学における「方法を物語る」こと、つまり歴史家の調査の行程そのものを読者に開示することである。アカデミズムの「われわれ」が見せかけの中立性を自任するのとは反対に、方法としての「私」は歴史家自身の置かれた立場や利害関係をあらわにする。歴史家は自己自身を批判の対象とすることで、歴史の方法について反省をうながすことができる。また、研究の過程を可視化することは、歴史研究を民主化することにもつながる。『私』を用いることは、書法の選択である以前に、認識をめぐる自由である。われわれは、結果としての歴史よりも——科学的な理由により——プロセスとしての真理を、つまり合理的で説明可能で修正可能なやり方を好む¹²】。著者は最後に、近年、歴史を刷新する試みがさまざまな領域を横断する学際的なやり方で行われていることを指摘し、読者に向かってこのような脱専門化の潮流に加わるよう呼びかける。

現実の中の研究、おのれについての研究——この文学は社会科学の反省性と、その並外れた実験能力を利用する。こうして、研究としてのテキストとか、道筋としての自伝とか、過去における調査とか、社会的＝歴史的ルポルタージュとか、視聴覚的書法とか、ドキュメンタリーの演劇といった、さまざまな雑種の形式が出現する。これらの文学的形式はまた、歴史学的、社会学的、人類学的なものでもある。それらは、社会科学の書法を刷新するとともに、世界について書くことを提案するという、二重の挑戦に解決をもたらす¹³。

2 『私にはいなかった祖父母の歴史』

2012年の『私にはいなかった祖父母の歴史』は、『歴史は現代文学である』でジャブロンカが提案した、歴史の書法を刷新する試みの一つである。同書は、著者が生まれるずっと以前にアウシュヴィッツの強制収容所で死去した、父方の祖父母の伝記である。著者の祖父のマテス・ヤブウォンカと祖母のイデサ・フェデルは、ともにポーランドのパルチエフのユダヤ人村（シュテトル）出身の共産主義の活動家であった。

11 HLC, p. 276.

12 HLC, p. 295.

13 HLC, p. 313.

活動が行き詰まると、彼らは1930年代後半にフランスに亡命し、パリで不法滞在者として暮らすことになる。第二次大戦においてフランスがドイツに占領され、ヴィシー政権が成立すると、夫妻は身を隠して生活することを余儀なくされた。彼らは1943年に一斉検挙により逮捕され、ドランシー収容所、次いでアウシュヴィッツ強制収容所に移送され、そこで死去した。

ジャブロンカは、会ったことのない祖父母の足跡を求めて、さまざまな調査を行った。彼はフランスやポーランド、イスラエルへと赴き、各地の公文書館で資料を調査し、パルチュフやパリの路地を歩き回り、家族や親族、祖父母を知る者たちに聞き取りを行った。同書では、歴史家自身の調査の過程が、その時々の方の思考の流れや感情の動きとともに語られる。たとえば、著者がパルチュフ友の会の納骨堂を訪れる場面では、歴史家としての立場と家族としての感情との相克が示される。

それらを丁寧に脇に払って、私はコレットの差しかける傘の下、石に刻まれたすべての名前を写真に撮る。突然、私は手を止める。

——これは冒瀆じゃないだろうか。

——全然そんなことはないわ！、とコレットは断言する。記憶の伝達よ、彼らもうれしかったはずだわ¹⁴。

こうして同書においては、一方ではパルチュフからパリを経てアウシュヴィッツに至る祖父母の人生の物語が、他方では祖父母の足跡を追い求める歴史家の現在の調査の物語が、並行して語られる。過去と現在が絶えず交錯し、互いに干渉し合うような叙述スタイルは、大文字の〈歴史〉の直線的な物語とは対照的なものである。この作品は単なる歴史研究としてではなく、調査の行程を描いたドキュメンタリーとして、あるいは私的な喪の作業についてのエッセーとしても読むことができる。

著者の祖父母の生涯が歴史研究の対象として意義を持つのは、それが一世代の代表としての普遍性を有するからである。とはいえ、著者はかならずしもそのような一般化の作業に満足するわけではない。個人を集団に帰属させること、具体的な存在を抽象概念に還元することは、その個別的な性格を否定することであり、個々の人生の特異性を消してしまうことになるだろう。しかし、あらゆる歴史上の事件は一回性の出来

14 Ivan Jablonka, *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus*, « Points Histoire », 2013, p. 120 (イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史 ある調査』田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年、110頁)。以下、同書についてはHGPと略記しページ数を付記する。

事であり、歴史家と対象の出会いもまた一期一会なのである。著者が自分の祖父母という私的な存在を研究対象に選んだのは、歴史的存在が根源的に持つ特異性について、また歴史家と研究対象の出会いの一回性について、読者の注意を喚起するためにほかならない。

私は私の祖父母が一つの世代を象徴するが故に彼らを特別な対象とする。彼らは彼ら自身よりも大きいからである。どういう資格においてであろうか。シュテトルから西欧への歩みだからであろうか。スターリンとヒトラーの間に生きられた悲劇だからであろうか。[...] 言葉は嘘をつく。発せられるや、多様な存在者たちを裏切り、彼らの自由をないがしろにしてしまう。私は「ユダヤ人」と言うことで、私の祖父母をアイデンティティーの覆いの下に再び閉じ込めてしまうことになる。しかし彼らは生涯にわたりそれを壊し、普遍を抱こうとしたのである¹⁵。

家族でも歴史家でもある著者の視線は、こうして私的なものと公的なもの、個人的なものや普遍的なものとのあいだを絶えず往復する。たとえば、著者がパリにおける祖父母の逮捕記録を発見する場面。この発見は、ジャブロンカ個人にとっても、そして歴史家にとっても、特別な意味を持つ。それは個人にとっては、自らの祖先が穏健な順応者ではなく永遠の不法滞在者（サン・パピエ）であることを示す証拠である。他方で、歴史家にとっては、第三共和政とヴィシー政権のユダヤ人政策の連続性を明かしたてる証拠である。いかなる歴史的事実も個別性と普遍性の両面を合わせもつ——ジャブロンカはこのような事実を示すことで、伝統的歴史学の中核をなす「大文字の歴史」なるものを解体しようとする。

いつかこの発見をするために自分は歴史家になったのだと私は思う。私たち家族のいくつもの歴史（histoires）と、大仰な大文字で書かれる、人がふつう歴史（Histoire）と呼ぼうとするものの間の区別はまったく意味がない。両者は厳密に同じものである。[...] たった一つの自由、たった一つの有限性、たった一つの悲劇があって、それが過去を私たちの最大の富にもし、また私たちの心が浸る毒の水盤にもするのである¹⁶。

15 HLC, p. 370（邦訳書354頁）。

16 HLC, p. 164-165（邦訳書154頁）。

ジャブロンカはここで、『歴史は現代文学である』で述べた「方法としての私」を最大限に活用する。歴史家は、自らの調査の行程を開示することで、歴史という営みの不確実性——人間が過去について知ることの難しさ——をあらわにする。しかしその一方で、「方法としてのフィクション」を活用することで、収容所における祖父母のありうべき姿を想像力豊かに描いてみせる。ここには多様かつ流動的な歴史家の視点があり、それらは互いに相対化し合うことで各々の可能性と限界とを照らし出す。結果として、そこに浮かび上がる祖父母の生涯は、きわめて断片的で不確かなものでありながら、それだけにいっそう強烈なきらめきに満ちている。

3 『レティシア』

2017年の『レティシア』は、2011年に実際に起きた殺人事件を題材に、その被害者の少女レティシアの生涯を再構成する試みである。レティシアは暴力的な父親と精神的な病を抱えた母親のあいだに生まれ、双子の姉のジェシカとともに施設に預けられた。フランスの児童扶助制度に従い、姉妹はともに里親のパトロン夫妻に預けられた。しかし彼女は18歳のときに性的暴行のすえに殺害され、遺体は切断され遺棄された。多重累犯者であるメロンという男が犯人として逮捕され、裁判で終身禁固を宣告された。その後、パトロン氏がジェシカを含む里子の幾人かと性的関係を持っていたことが発覚し、告発され有罪判決を受けた。

この事件はいわゆる三面記事に属するものであるが、ジャブロンカはあくまでそれを歴史の対象として取り扱うと宣言する。「私は、三面記事 (fait divers) がまるで歴史の対象のように分析しうることを示したい。三面記事は決して単なる「事件」(fait)ではないし、少しも「雑多」(divers)ではない¹⁷」。歴史家とジャーナリストは、事件を調査し真相を記述するという点で一致するが、その姿勢はかならずしも同じではない。ジャーナリストが事件のスキャンダラスな面を強調し、事件の特異性によって読者の情動に訴えかけるのに対し、歴史家は事件の普遍的な面に注目し、事件を通して社会の一般的な状況を解明しようとする。それゆえに著者は、レティシアの偶発的な「死」ではなく、あくまで恒常的な「生」を問題にしようとする。「レティシアはその死によってのみ価値があるわけではない。彼女の生も重要である。なぜならそれ

17 Ivan Jablonka, *Laëtitia ou la fin des hommes*, Seuil, 2016, p. 8. 以下、同書についてはLと略記しページ数を付記する。

は一つの社会的事実だから。それはそれ自体よりも大きな二つの現象を示している。子供たちの傷つきやすさと女性が受けている暴力である¹⁸】。

この事件が反映するのは、現代社会において女性や子供が置かれている暴力的な状況である。レティシアが生きた世界は、さまざまな性暴力であふれていた。姉妹の父親の母親に対する性暴力、パトロン氏の里子たちに対する性暴力、殺害犯メロンの被害者に対する性暴力——レティシアの殺害はこのような男性の女性に対する暴力を象徴する事件となる。「レティシアは『女性として』殺されたのだ——彼女のうちに、服従させ、押しつぶし、破壊すべき女性がいたかぎりにおいて。レティシアの殺害は、女性蔑視による犯罪であり、懲罰でも復讐でもあった¹⁹」。

この事件はメディアで大々的に取り上げられ、性犯罪をめぐる激しい論争を引き起こした。事件を契機に、共和国大統領ニコラ・サルコジは現行の司法制度を激しく批判し、性犯罪に対する取り締まりの強化を訴えた。このことは司法関係者の激しい反発を招き、大規模なストライキを引き起こすにいたった。ジャブロンカによれば、サルコジの行動は、事件を利用して社会の分断をあおろうとする悪質なプロパガンダであった。暴行を受けたレティシアの身体は、いわばサルコジによって政治的に利用されたのである。「レティシアは両親によって生まれ、メロンによって殺され、そしていわばサルコジによって捏造された²⁰」。こうして大統領サルコジと殺害犯メロンは男性的暴力という点で、そしてサルコジと里親のパトロン氏は偽善的な父性的権力という点で重なり合う。かくしてこの事件は、社会全体を支配する性的な権力構造を幾重ものかたちで象徴するものとなる。

ジャブロンカの目的は、単に事件の真相を解明することではなく、事件を通じて現代社会を支配する構造的な不正を明らかにし、読者に向けて改革の必要性を訴えることにある。それゆえに、研究の学問的な厳密さと社会的な公益性とは決して矛盾するものではない。歴史家の仕事は常に、学問的な真理の探究であると同時に、社会に対するアンガジュマンでもあるのだ。

レティシアの死の真実は、その存在の真実や、彼女が耐えた孤独や、彼女が選んだ道や、彼女自身の環境や社会から切り離されると、ほとんど重要ではなくなる。あれらすべての調査者の仕事のおかげで、レティシアがしたことと、男たち

18 L, p. 9.

19 L, p. 321.

20 L, p. 119.

が彼女にしたことが理解できるようになったが、あの仕事は民主主義と無関係ではない。安全が権利であるがゆえに、われわれは悪人を逮捕する。われわれはフランスの民衆の名において彼らを裁く。私が思うに、18歳で殺害された民衆の娘の人生を語ることは、万人の利益になる企てであり、公益のための任務のようなものだ²¹。

同書におけるジャブロンカの叙述の形式は、『祖父母の歴史』以上に複雑なものとなっている。そこには少なくとも四つの主要な時間軸が認められる。1) レティシアの殺害前後の数日間の物語、2) レティシアの誕生から事件に至るまでの生い立ち、3) 事件の発覚から犯人の逮捕を経て判決にいたるまでの経過、4) 著者自身による調査の行程。これらの物語は細分化されて57の章に配置され、複雑に絡み合いながら語られる。

ジャブロンカの調査の物語においては、レティシアの双子の姉のジェシカとの交流が大きな役割を演じる。彼女は著者にとって、取材対象や証言者であるだけでなく、レティシアと並ぶ主要人物の一人でもある。二人の姉妹はいわば、互いの運命を映し出す鏡のような存在である。レティシアは不幸にも殺害犯の犠牲となったが、ジェシカは里親の性暴力を受けながらも社会に出ることに成功し、現在は食堂で調理師として働いている。その意味でジェシカは本書のもう一人のヒロインであり、レティシアが持ちえたであろう未来を象徴する存在である。

最後に、レティシアは否と言った。メロンへの否。権威への否。コカインへの否。誰かが代わりにした決定への否。脅迫や、ハラスメントや、殴打や、性関係の強制への否。[...] 臆することも震えることもなく、強い明確な声で、否と言った。そのために生命を失った。

彼女は自由な女性として死んだのだ。

彼女の死がジェシカを解放した。レティシアの死は友人たちに、パトロン氏に反対して証言する勇気を与えた。ジェシカは妹や友人たちのおかげで、ロジェール街道の生け垣を飛び出した。

彼女は自由な女性として生きている²²。

21 L, p. 350.

22 L, p. 319-320.

こうしてジェシカの平凡な生活そのものが、歴史家の視線を通過することで、より普遍的な意味を持つものに——そしてよりかけがえのないものに——変貌する。「もし、この名もなき娘の中に現代のヒロインが隠れており、その精神力が人生の大小さまざまな不幸において手本になりうると知ったならば、食堂にいる全員がひざまづくことだろう²³」。この事実が感動的であるのは、そこに何かしら例外的なものがあるからではなく、それが社会の一般的状況を反映するものとして——しかし歴史家と研究対象の一回性の出会いの中で——提示されているからである。その意味で同書もまた、『祖父母の歴史』と同様に社会科学の書法を刷新する試みであり、ジャブロンカの歴史家としての新たな飛躍を示すものと言えるだろう。

おわりに

以上のように、ジャブロンカは『歴史は現代文学である』において、新たな書法を創造することで歴史ジャンルを刷新することを提案する。そしてさらに『祖父母の歴史』や『レティシア』において、そのような試みを自ら実践してみせる。歴史は科学でも文学でもあるという彼の主張は、決して折衷主義的なものではなく、自らの歴史研究によって裏打ちされたきわめて現実的なものと言うことができる。それでは、このようなジャブロンカの仕事は、今日の歴史研究においていかなる意義を持ちうるのだろうか。

近年において、記憶の問題がさまざまなかたちで注目を集めている。ピエール・ノラ編集の『記憶の場』（1984-92）は、集団的記憶をめぐる大規模な共同研究であり、記憶の問題が市民権を得たことを示す記念碑的な企画であった。しかし、記憶の問題の重要性が認知されるにつれ、それは次第に政治的な性格を帯びようになり、さまざまな論争や摩擦を引き起こすようになった。たとえば、ヘイドン・ホワイトとカルロ・ギンズブルクのアウシュヴィッツをめぐる論争²⁴、あるいはクロード・ランズマンとジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのアウシュヴィッツをめぐる論争²⁵が挙げられる。また、フランスでは2005年の引揚者法の制定の際に、過去の植民地主義の功罪をめぐる論争が起こり、公権力が歴史解釈に介入することについて、歴史家や知識人が賛

23 L, p. 332.

24 ソール・フリードランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』上村忠男他訳、未来社、1994年を参照。

25 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお』橋本一径訳、平凡社、2006年を参照。

否両論を繰り広げる一幕もあった²⁶。日本でも現在、南京大虐殺の問題や従軍慰安婦の記憶をめぐる、学問的であると同時に政治的な論争が続いている。そこでは、歴史は科学として真理を述べるべきという要求と、歴史は物語であるがゆえに真理を確定しえないという懐疑主義のあいだで、議論はともすれば硬直に陥りがちである。

歴史は科学でも文学でもあるというジャブロンカの主張は、このような閉塞状況を打破し、歴史についての開かれた議論をうながすものである。その基本的な姿勢は、ひとこと言くと、出来合いの結果よりも探究の過程そのものを指し示す点にある。それは、歴史研究の現場を明らかにすることで、現代の歴史学が抱えるさまざまな問題——歴史と記憶の対立、歴史のフィクション性、表象不可能性など——を整理するのに役立つだろう。とはいえそれはかならずしも、問題の最終的な解決を即座にもたらすものではないだろう。実利的な効果のみが求められがちな今日の風潮の中で、このような提案がどれほどの求心力を持つかは定かではない。とはいえこのような地道な実践を重ねることこそが、歴史研究を前進させる最も確かな手段であるとジャブロンカは信じているように見える。

付記

本論文はJSPS科研費26370373ならびに2017年度南山大学パツへ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

26 平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、2014年を参照。